

# 芸文書房及びその出版物に関する人工物発達学的研究

梅 定娥<sup>\*1</sup>

## Yiwenshufang and its publications

Meidinge<sup>\*1</sup>

**Abstract** - Yiwenshufang was a bookstore and publisher that was built from funds raised by Chinese and Japanese writers in Manchukuo. Guding, who was known as the most famous Chinese writer in Manchukuo, was the president. Yiwenshufang had cooperated in propaganda of the Greater East Asia War and Manchukuo's policy. At the same time, instead of pursuing commercial profit, Yiwenshufang had only published and sold the Chinese and Japanese books that were selected carefully to improve people's intellectual level.

**Keywords** : Guding, Yiwenshufang, Manchukuo, publisher, Ethnic harmony

### 1. はじめに

出版物はメディアの一種として、民衆に影響を与える。また、雑誌などの出版物は、人工物であり、そのユーザはもちろん読者であるが、その製造者の編集者も、同時にユーザである。本論文は、「満洲国」(1932-1945)の「満人」(中国人)経営の出版社芸文書房を取りあげ、その設立経緯、出版物の性格を考察し、それを通して、出版者の思いをさぐる。

### 2. 芸文書房

芸文書房(合資) 新京長春大街 117(電 2-1392)  
社長 徐長吉 営業局長兼徐長吉 出版局長 趙孟原  
企画部長 滕毓鑫 図書部長 単更生 営業部長 唐松亭  
販売部長 趙振興 [1]

以上は 1943 年満洲芸文聯盟が発行した『満洲藝文年鑑』の「出版社一覧」のなかの芸文書房に関する記述である。社長兼営業局長の徐長吉(1914-1964)は筆名が古丁で、出版局長の趙孟原(1912-?)は筆名が小松で、図書部長の単更生(1910-?)は筆名が外文で三人とも「満洲国」文壇で活躍していた作家である。

#### 2.1 徐長吉(古丁)とは

徐長吉(古丁)は 1914 年長春の資産家の家に生まれ、南満洲鉄道株式会社経営の公学堂、中学堂の教育を受けて日本語が堪能であった。1931 年の満洲事変の影響で北京に亡命し、北京大学に入学した。その間、中国左翼作家聯盟北方部に加入し、組織部長となった。革命失敗後、長春(新京)に戻り、「満洲国」の国務院総務庁統計処で下級官僚として働いていた。その傍ら、古丁という筆名で石川啄木著『悲しき玩具』(1937)、夏目漱石著『心』(1939)、大川周明著『米英東亞侵略史』(1942)などを

翻訳し、『奮飛』(小説集、1938)、『平沙』(長編小説、1939)、『一知半解集』(エッセイ集、1938)などを創作した。また、1937 年 3 月に雑誌『明明』(月刊満洲社の城島舟礼の出資で)、1939 年 6 月に文芸誌『藝文志』(「満洲国」民生部の外局、満日文化協会の出資で)の創刊に携わり、当局の政治的な圧制と自らの文学理想の間でバランスを保ちながら文学活動を行っていた。これらの雑誌に集まった作家たちが「芸文志派」と呼ばれる。

1940 年 10 月、新京(長春)でペストが流行していたため、家族と隣人といっしょに一ヶ月近くの間健康隔離の生活を強いられた。隔離病院での体験が古丁の精神に大きな影響を与えた。ペストがおさまった後、1941 年 5 月、古丁は国務院の公職を辞め、友だちから資金を集め、小松、外文などといっしょに本屋兼出版社、株式会社芸文書房を設立し、その社長となった。

#### 2.2 設立経緯

芸文書房の設立経緯については詳しい関係資料はまだ見つからないが、1940 年 10 月の設立当日の様子は『満洲評論』に載せた矢間(大内隆雄)の文章からうかがうことができる。

満洲文学のホープである古丁、小松、外文等の諸君がみな官や職を辞して、新京で本屋を始めた。出版業であり、本を賣る店でもある。讀書週間の 10 月 11 日賑やかに開業した。

満系出版界の不振は周知の事実であつた。これらの諸君が自ら資本を集め敢えてこの仕事に乗り出したのは、無論そのやうな現実を残念だとしての行動なのであらう。相當な職場を辞してのこの創業は背水の陣を布く覺悟あつてはじめて出来たことであらう、その意氣や壯とすべしである。(略)

芸文書房は新京のいはゆる城内の中心、大馬路に長春大街が交叉する四つ角を數軒東に入つた所にある、新しい建物である。直ぐ斜め前には大きな満系

\*1: 総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻

\*1: The Graduate University for Advanced Studies, School of Cultural and Social Studies, Department of Japanese Studies

映畫館の國都電影院がある。附近には益智書店や商務印書館などの舊來からの木屋もある。場所としては良い位置に在ると言へよう。(略)

ほかの満系書店と比較して一つの著しい特徴は、日本の書籍がかなり澤山並んであることだ。それもしつかりした選擇によつて選ばれてゐることが一々見て行つてうなづける。

日本の本もかなり賣れますよ開業の日に、古丁さんはさう語つてゐた。(略) 芸文書房のマークは緑色で圓の中に駱駝が一匹ゐる圖である。

駱駝は何の象徴です？

私が聞くと、

漫々的といふ満人の性格ですといふ返事であつた。

ハハア、砂漠に行くその行きその意氣込みなんだな、水が無くたつて頑張つて行こうといふその逞しさなんだな、と私は心の中でうなづいたのであつた。芸文書房の誕生は新京の文化界に清新なものを齎した。[2]

以上の大内の文章からいくつかの問題を考えてみよう。まず、「背水の陣」とは、古丁も小松も外文も、もとの職場をやめて芸文書房を經營したことを指している。特に古丁は総務庁統計処の事務官で、まさに「相当な職場」を辞めたのである。

外文も総務庁に勤めていた。小松は満洲映画株式会社の社員で『満洲映画』の編集をしていたが、『満洲映画』が満洲雜誌社から發行されるようになったため、それにつれて満洲雜誌社に移っていた。小松もそれを辞して、芸文書房の出版局長になったのである。古丁は、隔離生活ののち、しばらくは総務庁に籍を置いていたが、1941年5月に正式に公職を辞めた。

この間、私は外省に転勤のためにあちこち奔走していた。主にペストから離れたかったからだ。私は家を一軒売り、県長に混じつて学生になった(転勤ための研修と思われる一引用者)。それから、9年間勤務していた役所を離れて、ある半官の民間団体に派遣され、その末席についていた。(略) 生活がこのように行き詰まり、精神がこれほど激しくゆれ動いたら、どれほど丈夫な精神の持ち主でも、狂いそうになるか、そうでなければ、痴呆症にかかりそうだった。しかし、私はまだ野望を抱えていた。それは出版界でよりいい本を印刷して出すことだ。しかし、これはあまり期待できそうなことではないようだ。なぜなら、私は統計官になったことがあるとはいへ、足し算でも指を数えてやらなければならないほど計算が出来ず、商売を知らず営利を心得ていないからだ。(略) しかし、私はまた考えた：死線も

乗り越えてきた以上、行き詰まっても何も恐れることなどない、と。

(這之間、我曾經四處奔走轉勤外省，主要是想離開黑死病。我曾經賣掉了一處房子；曾經和縣太爺們混在一起當過一回大生徒；曾經離開了勤續了九年的大衙門，被派在一個半官的民間團體，坐最末的席次，(略) 生活像這樣碰壁，精神像這樣激盪，即是怎樣健康的魂靈，倘不變成半瘋，也要化為半呆的。然而，我還有野望，(略) 就是想要在出版界裡稍微印一點好書，然而這事又是怎能奢望呢？我雖然當過一任統計官，卻是連加法都得攀着手指來算，不懂商情，昧於營利(略) 但是，想了想：我已經越過了死線，即使碰壁又有何不可呢？[3])

この文章の中で古丁は、「生活がこのように行き詰まり、精神がこれほど激しくゆれ動いた」と言っているが、何故かは言っていない。辭職の理由として、古丁は「主にペストから離れたかったからだ」と言っているが、その時ペストはすでにおさまっていたので、それは口実に過ぎないと思われる。あるいは「ペスト」は何かの暗喩かもしれない。それについては、ここでは謎のままに残しておくしかないようだ。創作や翻譯について考えるなかで、ヒントが見つかるかもしれない。

### 2.3 特徴

先に引用した大内の文章には、他の満系書店と比較して、芸文書房のいくつかの特徴が見られる。①日本語の本も売っている。②厳選した本しか売らない。③書房のマークは駱駝である。

古丁は日本の出版界を良しとし、それに学ぼうとしていた。『明明』時代の「城島文庫」、芸文書房が立てた後の「学生文庫」をはじめ各種の企画には日本の出版界を倣ったものが多い。また、満洲は日本支配下に置かれていたから、それを嫌って日本語の本を読まない人もいるが、古丁は、それは偏見だと言っていた。

私は常にある種の偏見を耳にする、即ち日本語の本を読まない、と。これは全く間違つた知見だ。そう思っていなければよろしいことだが、そう思っていたら早く考え直すべきだ。

(我時常聽見一些偏見，即不讀日本文的書；這簡直是繆見，倘無這種風氣自然可慶，倘有也要及早革除的[4])

漢語の出版物が少ない「満洲国」では、日本語の本を拒むなら、知識への道が閉ざされてしまう。翻譯などを通して漢語を充実させ、成長させる努力をし、漢語の出版に頑張るが、日本語を拒否せず、日本語の書籍も厳選して売る。これが、古丁がとつた態度である。日本語の本を店頭に並べる基準は、面白くて、知識を与えてくれ、そして時局に対する認識を深めてくれる市民教育に相応しいものの類であろう。

「駱駝」についても考えてみたい。『明明』創刊の時、新雑誌のタイトルの候補となっていた。水の潤いもなく、沙漠の中を歩く駱駝は堅実、忍耐、希望の象徴である。芸文書房から出版された本の裏表紙の駱駝のマークをコピーして並べてみると、足の位置がそれぞれ違う。駱駝が歩いていることがわかる。芸文書房およびその経営者は、次のオアシスに向かって満洲の文化、出版の沙漠の中でゆっくり歩いている一匹の駱駝だということの意味しているのであろうか。その満洲民衆の読書生活を改善し、民度を高めるために出版界でコツコツやっけていく決心が見える気がする。また、古丁は文学での「独歩」精神をそのまま出版界に持ち込んだこともわかる。

株式会社芸文書房は合資と言われているが、その資金は同志や仲間、また、彼らの事業に同情を持つ人から集めたものである。日本人文化人にも出資した人がいた。

この夏満洲へ出掛けた田畑修一郎に逢つたら、古丁氏は去年満洲國政府の事務官を罷めて仲間と合資で芸文書房といふ満文の出版の書肆を始めたが、（これが僕も知ってゐた）、その時、何気なく一萬圓出資したといふ話を向うで聞いて来て感心してゐた。[5]

芸文書房の設立は日本の文人からかなりの支援を受けていたことがわかる。このようにして芸文書房が立てられたが、社長古丁の出版にかけた野心は果たして実現していったらうか。

1941年3月「満洲国」國務院弘報処から「藝文指導要綱」が發布され、「わが満洲国の藝文は八紘一宇の精神の美的顕現なり」という方向が打ち出された。8月に各種の団体を一元的に改組させ、満洲芸文聯盟が結成された。戦時統制である。

12月、見通しの立たない対中国戦争を打開するため、日本は対米英戦争を開始した。翌年、「満洲国」建国10周年にあたる1942年には、第2期建設(第2次建国とも言われる)に入り、「満洲国産業開発第二次五ヵ年計画」を実施しはじめた。この年、関東軍や協和会などの建国組は、「満洲国」建国から「大東亜戦争」の準備がはじまっていたとし、「民族協和」を掲げる「満洲国」は「大東亜共栄圏」のお手本だということをさかんに喧伝した。「満洲国」は、ソ連を睨んだ日本帝国主義の産業基地から対米英戦争の兵站基地へと位置づけを変え、農村の増産体制にも拍車がかかった。「民族協和」は、「満人」の力をあてにするために必要なスローガンだったのである。

### 3. 芸文書房の抱負及び出版された書籍

芸文書房はどのように経営されていたか、その詳細を記録した資料は発見されていない。ここでは現在まで見つけた関係資料から当時の様子を推測するしかない。

1942年1月8日の『盛京時報』に「今年満洲文芸出版」[6]に芸文書房の新年度の仕事の計画として以下のように書いてある。

- 1 二種類の定期月刊誌を発行する
  - 2 現代日本文学選集7巻を刊行する。テキストと翻訳者はすでに決定されている。
  - 3 満洲文学10年大系——計史略篇、評論篇、小説篇、詩歌篇、劇曲篇を出す。執筆者は既に決定されている。
  - 4 駱駝文学叢書——小説、詩集、随筆、計12巻、作者はすでに決定されている。
  - 5 現代世界文学選集、計ドイツ篇、フランス篇、ロシア篇、イギリス篇、南北アメリカ篇、文学史略篇、計6巻、執筆者は決定されている。
  - 6 少年叢書——計日本童話選、ドイツ童話選、イタリア童話選、イギリス童話選、北欧童話選、及びその他計12巻
  - 7 学生文庫——計学生と建国、学生と読書、学生と日語、学生と科学、学生と歴史、学生と地理、学生と算術、学生と社会、学生と物理、学生と化学、学生と音楽、学生と体育、学生と数学、計14巻
  - 8 人傑叢書——計西郷隆盛、リンカーン、ジンギスカン、バイロン、ビスマルク、孔子、康熙大帝、東洋詩人伝、世界文学家人伝、エジソン、計12巻
  - 9 天下事叢書——フランスから帰る、トルコスタンへの旅、科学者の旅、チベット踏破記、欧米遊記、巡礼、旅愁、中国紀行、計12巻
  - 10 生活叢書——人生論、恋愛論、処女の心、育児法、調理法、修養、趣味、娯楽系12巻
- そのほかに、雑誌の計画と児童読物もある。

雑誌、叢書、大系、選集、文学創作、文学翻訳、学生文庫、生活叢書等々、以上のリストを見て、芸文書房の出版計画は芸文志事務会の時よりさらに厩大で野心的だとわかる。その内容から見れば、1の雑誌の内容については詳しく説明がないからその方向性が把握しにくい。2、3、4、5はすべて文学か文学関係のものである。6、7、8、9は学生や少年向けの知識紹介、教養ものである。10は生活智恵紹介するといえる。すなわち、その出版計画から見れば、芸文書房は、主に文学や文学関係の本、それから学生や市民向けの知識紹介などの方向が見える。言い換えれば、文学の普及と民衆(学生)の文化レベル向上を目標にしていると言えるであろう。これは作家としての古丁と、文化事業ではあっても営利に走る普通の出版社社長との異なるところである。

さて、芸文書房設立早々のこれらの計画は、どこまで実現されたか、それははっきり分からないが、ここで筆者の4年間の調査成果に合わせて検討してみる。

1に言われた2種の定期雑誌には、今見えるのは『藝文志』のみである。それは満洲芸文聯盟の「満語」機関誌で、1943年11月になってからはじめて創刊したもの

で、当局から補助金をもらっていたと思われる。もう一つの雑誌の発行は見送られた可能性がある。

2の現代日本文学選集7巻は、杜白雨訳『島崎藤村集・春』、儒巧・文華訳『谷崎潤一郎集・春琴抄・猫と庄造と二人のおんな』、沈堅訳『武者小路実篤集・愛と死』、郭初訳『横光利一集・寝園』、爵青訳『島木健作集・生活の探求』、希文訳『幸田露伴集・幻談・五重塔』と古丁訳『片岡良一集・現代日本文学史略』である。しかし、筆者が実物を確認したのは1942年9月に出版された杜白雨訳『島崎藤村集・春』と儒巧・文華訳『谷崎潤一郎集・春琴抄・猫と庄造と二人のおんな』のみで、7巻すべて刊行されたかどうかははっきりしない。

3の満洲文学10年大系の計画については実際の刊行物は1冊も確認されていない。

4の「駱駝文学叢書」は出版された。筆者は小松著『人和人們』(1942)、『野葡萄』(1943)、古丁著『譚』(1942)、『竹林』(1943)、山田清三郎著『満洲文化建設論』(日本語)(1943)、慈灯著『老総短編集』(1942)、爵青著『歐陽家の人們』(1941)、『帰郷』(1944)、疑遅著『天雲集』(出版年月不明)、大内隆雄著『文芸談叢』(漢語、1943)を確認した。中には「満人」の漢語作品もあれば、日本人の漢語作品もある、また、日本人の日本語作品もある。在満日本人の日本語文学作品も出されていると他の研究者から聞いたが、筆者は確認していない。

5の世界文学選集は確認されていない。世界文学集については、古丁はずっと呼びかけていたが、用紙や印刷技術などの制限で、芸文書房のような民間出版社では出来ないかもしれない。それで古丁は出版の連合を呼びかけたが、とうとう実現しなかった。満洲図書株式会社から発行した『世界名小説選』の第2集(1941)から第5集(1942)までは確認したが、中には日本、インド、ハンガリー、ポーランド、ソ連、ドイツなど国の短篇が収録されている。前から中国で翻訳されたもので、満洲の人の手による新しい翻訳はなかった。

6の少年叢書については、共鳴著『老いた鰐の物語』(老鰐魚的故事)、季春明著『風兄』(風大哥)、慈灯著『月の中の出来事』(月宮里的風波)などその具体的な書名と一部の作者名は確認しており、出版された可能性が高いと考えられる。書物自体は確認していない。

7の計画の内容とは違うが、学生文庫の書名と作者は確認されている。それは、中島健蔵著古丁訳『学窓と社会』、辛嘉著『学生と読書』、爵青著『学生と文芸』、杜白雨著『学生と哲学』、遅鏡誠著『学生と日語』、高遵義著『学生と体育』、うち実物が確認されたのは『学窓と社会』(1941)のみである。

8の人傑叢書については計画に出された人名の通りではないかもしれないが出版された。筆者が確認したものには、史明訳(著者不明)『ガリレオ伝(加里雷伝)』(1942)、

小田岳夫著外文訳『魯迅伝』(1941)、爵青・吟梅(訳)『キュリー夫人(菊里夫人伝)』(上)(1942)がある。

9の天下事叢書については確認されていない。

10の生活叢書が出版された。筆者が確認した5冊は翻訳書が多くて、ほとんど恋愛に関するものである。中に史明訳『円満の夫婦(美満の夫妻)』(1942)、堀秀登著夏明訳『情熱的な恋愛(熱情的恋愛)』(1942)などである。

以上は1942年の計画について見てきたが、満洲当時の資料には紛失したものが多いので、筆者の確認範囲に限界がある。これからも引き続き調査する必要があると痛感している。

#### 4. 文芸雑誌『藝文志』

1940年10月、日本国内では大政翼賛会が成立した。「満洲国」では、1941年3月に『藝文指導要綱』が発布され、同8月に芸文界の一元的な組織、満洲芸文聯盟が成立した。1941年12月、真珠湾事件で、日本対米英戦争がはじまった。「満洲国」も対米英戦争の戦時体制に入った。満洲芸文界では、1942年1月に芸文社発行の『藝文』、2月に芸文聯盟発行の日満語版『満洲芸文通信』が創刊されたが漢語の雑誌を持たなかった。古丁らは満洲芸文聯盟の漢語機関誌の創刊を呼びかけ、1943年11月『藝文志』が漸く芸文書房から創刊された。『藝文志』は1944年10月まで発行し続け、あわせて12冊が出されていた。その内容を考察してみれば、文芸作品には主に三つのモチーフがあらわれている、つまり、「民族協和」、「勤労増産」、「鬼畜米英」である。このような「聖戦」協力と国策に追随した内容は、その満洲芸文聯盟機関誌という性格に相応しい。一方、そのエッセイ欄を考察したら、満洲地元の民衆の文化的レベルの向上、民衆の読者生活と民族の向上心の養成にも努めていたことがわかる。また、1944年以後、日本の敗戦が目に見えるようになると、『藝文志』に「青年の責任と任務」(古丁)のような文章が発表され、日本人が引き上げた後の満洲の管理と運営を考える内容も見られる。

#### 5. その他の出版物

芸文書房は1945年まで続いていたので、他の計画も当然あった。以下では、調査の結果に基づいて、主な他の出版物を考察する。

##### 5.1 「快読文庫」

1941年11月に「満人」短編小説集『快読文庫』が出されたが、その後、小説集の中の短編小説を篇毎に独立した薄い印刷物として出した。中には小松著「火」(1941)、疑遅著「鳳鳴山の深秋」(1941)、正心著「藝文指導要綱解説」(1941)などがある。

## 5.2 鑑賞叢書と国学叢刊

鑑賞叢書には単更生編『白雪遺音』（1942）、趙振興（生没年不明）の編『忠義水滸伝全書』（1943）、劉鉄雲（1857-1909）著『老残遊記』（1943）のような明、清時代の白話小説である。それに対して、国学叢刊は『唐詩三百首註疏』（出版年不明）、『千家詩詳解』（出版年不明）のような伝統教養書である。非斯（李松伍）著『子學概論』（1944）、『漢学輯要』（1943）も確認した。

## 5.3 興亜叢書

これは戦時国策宣伝用の書物と思われる。確認したのは、『大東亜戦争の意義』（1942?）、『戦時米国内閣の苦悶』（出版年不明）、趙孟原『大東亜戦争常識宝典』（出版年不明）、『英美罪惡史』（1942）、徐古丁等訳『米英侵略東亜史』（1942）、『建国回想座談会録』（1942?）がある。『英美罪惡史』は満洲だけではなく、「大東亜共栄圏」の上海、北京でも同じ題名の資料がそれぞれ編輯出版されていた。「満洲国」では、このようなものは民間出版社の芸文書房から出版されたことから、満洲芸文家協会大東亜連絡部の部長として古丁の活躍ぶりがうかがえる。

## 5.4 日語総合講座（丸山林平先生主講、徐長吉先生助講）など

「満洲国」では日本語が出来れば出世しやすかったので、いちばん売れる出版物は日本語教科書で、各出版社がその出版に走っていた。芸文書房版の日本語教育関係の本は、建国大学教授の丸山林平（1891-1974）主講、徐長吉（古丁）助講だけである。これは入門編から翻訳編まで12編予定されていてどこまで出版されたか確認していないが、丸山林平と徐長吉（古丁）のコンビによるものなら、他の参考書より断然に良質のものであろう。ここからも芸文書房の書籍の厳選と品質の保証が見える。

このように、古丁を社長とする民間資本の株式会社芸文書房は、流行に迎合して金儲けに走ったのではなく、確実に読者に役立つ書籍だけを選んで出版したものと考えられる。芸文書房は、他の出版社のように上海出版物の翻刻を行ったのではなく、満洲地元作家の作品の刊行に力を入れていた。また、出版された書籍の中に漢語のものもあれば日本語のものもある、翻訳書はほとんど日本もので、西洋ものが見られない、「満洲国」戦時下の芸文書房は、民族の向上心と民衆の読書生活の養成のために、国策を取り入れながら出版事業を行っていたと考えられる。

「満洲国」では官営、私営出版社が林立していた。満洲図書株式会社は政府系の出版社で、満日文化協会発行の「東方国民文庫」から、学校用テキストまでの出版を独占して歴大な収益を得ていた。「満系」の民間出版社に、益智書店（詩人李冷歌（生没不明李文湘）が編集に勤めていた）が「文選叢書」「名著訳叢」「少年教養読み物」「大東亜建設名要人伝略」、五星書林が「青年叢書」な

ど芸文書房と似た叢書を出していた。これらの書店は芸文書房と何らかの提携関係があるのではないかと思われる。或いは、古丁の呼びかけに出版界、特に「満系」の出版社の間にある程度答え、意思疎通があったとも考えられる。

## 6. まとめ

芸文書房は、日、満文化人から集められた資金によって立てられた株式会社の本屋兼出版社で、社長は知名作家の古丁がなっていた。営利先行の出版社ではなく、厳選された漢語、日本語の本に限って販売したり出版したりしていた。満洲芸文聯盟の漢語機関誌『藝文志』の発行などをとおして、「満洲国」の国策や「聖戦」に積極的に協力している一方、満洲地方の文学作品の出版などによって、地元の文学の発展に力を尽くしてきた。更に、満洲民衆の読書生活の養成と文化レベルの向上にも努めていた。「大東亜戦争」後期日本の敗戦が目に見えるようになってくると、『藝文志』にあらわれているように、その編集者は日本人が引き上げた後の満洲の管理と発展も考えていた、と思われる。

人工物の視点からみれば、出版活動は、基本的な目的が情報提供にあるが、何のために、どんな情報を提供するかが、経営者によって取った方法が違う。「満洲国」の当時の社会的背景として日本占領下における日本語出版物の刊行と中国社会を背景とした漢語出版物の刊行という二つの可能性があった、そこで芸文書房が取った選択肢は人工物としてのひとつのあり方ではあったが他の方向性もありえた。他の方向性を排して芸文書房としての筋を通したのは古丁のような考え方があったからと考えられる。

## 7. 参考文献

1. 「出版社一覧」『満洲藝文年鑑』満洲藝文聯盟、1943年11月、289頁。
2. 矢間（大内隆雄）「芸文書房のこと」『満洲評論』、第21巻第16号、満洲評論社1941年、30頁。
3. 徐古丁「談三 夢境」『譚』、芸文書房、1942年11月、38頁。
4. 同上、49頁。
5. 浅見淵「満洲の作家たち」『日本學藝新聞』、1942年10月15日。
6. 新聞の「出版」に当たる字が見えないが、筆者の推測で入れた。